

災害ボランティア組織の変容過程 —— 日本災害救援ボランティアネットワークの事例 ——

渥美 公秀

大阪大学大学院人間科学研究科

要 旨

阪神・淡路大震災直後からの長期的な参与観察を通して、災害ボランティア組織の変遷を整理した。現場と研究者との協働的实践の一例である。

キーワード：災害ボランティア組織、阪神・淡路大震災、参与観察、協働的实践

1. はじめに

本稿は、阪神・淡路大震災を契機に設立された災害ボランティア組織、特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク(Nippon Volunteer Network Active in Disaster, NVNAD:西宮市)の変遷を整理したものである。NVNADは、災害救援と地域防災に特化し、各地の災害救援活動に参加するほか、平常時は、ネットワーク活動、防災まちづくり活動、講座・研修活動を展開している。現在、10名の理事、2名の監事のもとに、3名の専従スタッフが年間予算およそ3,000万円で運営している。

筆者は、NVNADの前身、西宮ボランティアネットワーク(Nishinomiya Volunteer Network, NVN)の設立当初から、研究班のメンバーとしてNVNに関わってきた。研究班の役割は、研究者として活動に参加し、現状を分析・抽象化し、活動の意味を検討・構築することである。Table 1に、NVN(AD)の変遷を整理した。各時期に現場スタッフが発した問いとそれに応じる研究班の言説も併記した。本稿では、NVNADの変遷を紹介し、研究班の言説については、関連論文の所在を明示する。

2. NVNADの活動経緯

2.1 阪神・淡路大震災時の緊急救援活動

(1995年1月17日-1995年4月)

西宮市役所には、発災直後より、全国各地からのボランティアが殺到し、大量の救援物資が届いた。混乱の中、2月1日に、西宮市自身もその構成団体となる西宮ボランティアネットワーク(NVN)が誕生した。NVNは、西宮市内で活動していた13団体の連合組織であり、西宮市と協力関係を維持しながら、物資や食料の配布などを行った。研究班は、活動の記録(e.g., 渥美, 1995)や参加者へのアンケート調査を担い、NVNの活動方針に関する連日連夜の議論に参加していた。

2.2 日本災害救援ボランティアネットワークへ

(1995年5月-1996年12月)

緊急時の救援活動もある程度落ち着いてきた頃、NVNは、みやこフェスティバル(1995年5月)を開催した。これを契機に、ボランティアの多くが故郷へ帰った。本部に残ったメンバーは、西宮での救援活動の経験を各地の災害救援に役立てるために、日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)へと組織を改称した。その後約1年間、国内外の被災地で災害救援活動を展開していった。

研究班は、NVNの組織運営において重要な役割を担うようになった。活動の現状を整理し、今後進むべき道を提案するなど、専従スタッフとの協働的实践(杉万, 1998)がようやく始まった。この頃、研究班

が直面した課題は、「ボランティアを含んだ災害救援を構想すること」であった。災害救援の現場は計画し尽くせないと認識していた研究班は、災害救援の現場を理論的に整理した。そして、集合的即興ゲーム（渥美, 1998a）をジャズの比喻を使ってスタッフに提示した。

2.3 災害ボランティア再考

（1997年1月－1997年12月）

1997年1月に発生した日本海重油流出事故は、大きな転機となった（渥美, 1999b）。NVNADは、後方支援活動を通して、“ボランティアをコーディネートする組織であること”を改めて確認した。折しも、特定非営利活動促進法制定への動きが生じ、ボランティアとNPOとの関係にも議論が及んだ。また、この時期は、重油流出事故への対応を通して、全国のボランティア団体との関係が深まりつつあった。

研究班は、スタッフと一緒に、その後の展開にとって極めて重要な事柄の検討を始めた。具体的に検討した問いは、「災害ボランティアの専門性とは何か？」（渥美, 1998b）、および、「平常時の防災活動はいかにあるべきか？」（渡邊, 2000）という問いであった。研究班は、前者に対し、既存のシステムの＜外部＞に立つことの重要性を指摘し、後者に対しては、“地域防災と言わない地域防災”というフレーズを提示した。ここでの議論は、以降のNVNADの基盤となり、活動の3本柱に反映されていった。

2.4 非営利組織への展開

（1998年1月－1999年3月）

1998年には、非営利で活動することを逸脱する行為が生じた。NVNADでは、組織の運営方針を再検討した。その結果、新しいリーダーを擁立することで事態を收拾した。その後、災害救援活動と防災まちづくり活動および各種研修講座を行うNPOとして、特定非営利活動促進法に基づいて、法人格を申請した。

研究班は、組織を再検討する過程で、それまで暗黙のうちに前提としてきた事柄を今一度議論の俎上に乗せた。議論は、災害ボランティアとは何かという極めて基本的な問いに及んだ。研究班は、ボランティアの自発性や無償性という言葉を疑い、“ただ傍ににいること”の重要性を指摘した（渥美, 1999a）。

2.5 全国的なネットワークの構築

（1999年4月－）

1999年4月に兵庫県から法人格が認証され、法人

としての活動を開始した（最新の活動は、<http://www.nvnad.or.jp/>を参照）。研究班は、災害NPOを災害救援の専門組織の亜流ではない（渥美, 2000）と位置づけ、災害救援活動に加えて「活動の3本柱」に参加し、スタッフとの協働を継続している。最後に、それぞれの「柱」の内容を簡単に紹介しておく。

第1の柱：「ネットワーク活動」 震災5周年に合わせて、「全国災害救援ネットワーク（Jネット）」の発足を開催し、その事務局を担っている。さらに、阪神地域において様々な活動を展開している団体とのネットワークを構築しつつある。

第2の柱：「防災まちづくり活動」 「地域防災と言わない地域防災」（渡邊, 2000）というフレーズをもとに、地域防災活動「わが街再発見ワークショップ」を行っている。

第3の柱：「講座・研修活動」 「災害救援実践ワークショップ」を開いている。さらに、全米災害救援ボランティア機構（NVOAD）の年次大会への参加を中心とした研修ツアーを実施している。

参考文献

- 渥美公秀 (1995). ボランティアを組織するボランティア - 阪神・淡路大震災における西宮ボランティアネットワーク（NVN）の事例 - *Business Insight* 10, 108-125.
- 渥美公秀. (1998a). 都市社会の安全. 建築と社会, 5, 32-33.
- 渥美 公秀. (1998b). ボランティア社会の行方. 組織科学, 31, 27-35.
- 渥美公秀. (1999a). グループ・ダイナミクスとボランティア研究. 大阪大学人間科学部紀要, 259-275.
- 渥美公秀. (1999b). 環境防災とボランティア活動の課題. 日本リスク学会誌, 11, 1, 24-26.
- 渥美公秀. (2000). NPOの条件整備のために. TOMORROW, 14, 42-50.
- 杉万 俊夫. (1998). 実践としてのグループ・ダイナミクス. 実験社会心理学研究, 38, 202-204.
- 渡邊としえ. (2000). 地域社会における5年目の試み - 「地域防災と言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察 -. 実験社会心理学研究, 38, 188-196.
- 渡邊としえ & 渥美公秀. (印刷中). 阪神大震災の被災地における「まちづくり」に関するフィールドワーク - 西宮市安井地域の事例 -. 実験社会心理学研究

Table 1 History of Nippon Volunteer Network Active in Disaster (NVNAD)

<u>Time</u>	<u>Events</u>	<u>Questions by Staff</u>	<u>Remarks by Research Team</u>
Disaster Relief 1995. 1. 17 1995. 2. 1	Kobe Earthquake Organize NVN		(Recording)
Toward NVNAD 1995. 5 1996. 1	Miyakko Festival Set up NVNAD	Accurate Planning	Collective Improvisation Game
Rethink Disaster Volunteers 1997. 1	Japan Sea Oil Spill Accident	Specialty of Disaster V? Disaster Prevention ?	Expect Unexpected Preventing Disaster without saying Disaster Prevention
Toward an NPO 1998. 4 1998. 12	Renewal To be incorporated	What is Volunteer, anyway ?	To sit close to the victims
For a National Network 1999. 4 2000. 1	Incorporated Start J-net	What is Network ?	Try not to become professional

Transition of a Disaster Volunteer Organization: A case of Nippon Volunteer Network Active in Disaster

Tomohide ATSUMI
Graduate School of Human Sciences, Osaka University

Synopsis

A transition of a disaster volunteer organization was examined, according to a longitudinal participant observation since the Great Hanshin Earthquake. The present study is an example of cooperative practice between a researcher and staff members of the organization.

Keywords: Disaster Volunteer Organization, Great Hanshin Earthquake, Participant Observation, Cooperative Practice